

紙か画面か網膜か

志村 良知

今どきの小学生にとつても、デジタル画面より紙で読む方が理解しやすいという実験結果があるという。現役時代、複写・プリンターメーカーで紙を扱っていた身として一寸うれしい。

紙と画面の優劣はCRTが登場したときから業界内では真剣に論じられてきた。初期のグリーンディスプレイにカタカナ・英数字の時代は、紙と画面は別物で、競合するものではなかったが、80年代に入ると白地の画面に黒で漢字仮名混じりの普通の日本語が縦にも横にも表示されるようになった。プリンターでの印刷品質も活字並になり、真の競合が始まった。

この頃、実験室では担当するテーマ別にフォント、画面の明るさ、コントラスト、印刷する紙の白さ、文字の濃さなど変えて隣の実験室の技術者や事務職の人に読みやすさ、誤字脱字の認識、内容の把握しやすさなどを判断させる「官能テスト」が頻繁に行われた。

得られた結論は手に持って自由な位置と距離で読める紙の圧勝で、当時のデスクに鎮座した巨大なCRTは紙の相手ではなかった。画面では気が付かなかった誤字に紙の上では一瞬で気づくことも多かった。

にもかかわらず、電子メールの一般化、日本語文書作成ソフトの品質向上、それらを支える大きなメモリーサイズを迅速に扱うハードウェアの品質向上等で、画面を直接見る習慣は一般化し、複写・プリンターメーカーのオフィスからも紙はどんどん減っていった。

タブレットの登場で画面も手に持つことも机に水平に置くこともできるようになり、紙と全く同等になった。違いは発光画面を読むのか、反射光で読むのかだけである。かつて発光で読む画面は目にも精神的にも良くない、という説があったが、今や発光画面の害について論じて、20世紀の見識、と無視されるだけである。

それどころか、眼球の表面に微細なプロジェクターを付け、網膜に直接画像を投影するという技術の開発が10年くらい先を目標に進められているという。世の中は変わるのである。

注 CRT=Cathode Ray Tube=陰極線管=ブラウン管